

250

二八八店弄249
親友卷40^P (有) 24

紀上363 (F) 3244
紀小486

上

去來紗別尊(月讀尊)は即位して倭王となら

都は、東国の伊邪国（宇佐国）に置かれた。

東には拘奴国（中国地方）が有り、その向

うに多くの国々を譲りする以前の西国・所

戒地ろ
か
あ
る
と
川
う

東海（瀬戸内海）の彼方のそちらの国々の

詳細は分からない
すゝめを
ものへに
と
で
あ
た

下 考 素 二 只 乃 母 國 人 下 下 下

わがう
おう
と
ひ
か
に

[illegible]

たー
い
し
や
と
き
と
き

[illegible]

素

[illegible][illegible]

句が今
ぬ
目
い
た
か
お
か

たのびたい

2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525
 526

るばかりであつた。
「いまに、目に物見せてくれようぞ」
いふ煙を睨みながら、倭王は、思わす拳を握
りしめていた。

月日は輝き渡り、平穏な世が続いた。
まるで水面下に渦を隠し、流水のように
表面上は全く何事もなく、静かに静かに、時
は流水過ぎてゆく。

「か、東海の小さな島国（日本列島）に
力の五角である倭国と拘奴国（中国地方）の二者
が敵対状態のまま共存できるはずはない」
「両雄並び立たず」
「両雄必ず争う」
などと言われるように、両者の間で、いつの

「ように」次々

後代の銅鐸には、
半部は図柄が描かれた。

2,503^P

違いない次々1199
相違ない②2506⁴⁹と
研ぎ澄まし1589⁷

日にか雌雄が決せらるだろう」と思われた。
（云々）
そのとき勝ち残るには、――相手より僅かでも強くなければならない。
こうして互いに睚みあい憎みあいつながら切磋琢磨――競い続け、いよいよ両者の力は研ぎ澄まされていった。
倭国と拘奴国の武器の製造技術は共に向上し、そして両国の文化も飛躍的に高まつていった。
とある東西の強者と強者の睚み合いは、期せずして、双方の文化を高めてゆくことになった。
例えは、――
東の国（中国・近畿地方）の銅鐸が次第に巨大化し、そしてその外表面に精緻な文のハツギを施していったのは、口技術力らの進歩を端的に示している。
と思われる。
そして一方、西の国（倭国）でも、東の国

「か」でなく 作元前200年 神代110才は 270年 2504P 2506P49 2504P 2614.13(日) 武器に限らず

に負けたしとばかりに富国強兵の旗印が掲
との決戦にそなえ 着々と力が蓄えられて
いった

・いかも、西の倭国は大陸への足掛ともいう
べき狗邪韓国(朝鮮半島南端の国)を領有し
ていただけに東の国よりもより一層
大陸の文物を導入するのにも有利だった

たと言えよう
・倭国は、積極的に大陸の優れた武器製造
技術・建築技術を学びとり、

物を取り寄せ、咀嚼し吸収していったに違いない
・まさに、倭国躍進の時であった、と推察さ
れる。

こうして、二代目又は三代目の応神天皇へ仲
哀天皇の幾代目かの孫は、日本書紀が書き記している

通り、三一〇年二月十五日にお崩れにな
ったのであろう。(応神紀四十二年二月十五日条参照)

は、は続いているようにある。(応神天皇の御世
は、は続いているようにある。(応神紀によると

110.11.29 三九四年九月九日 山形 第一表参照 前頁19行 「と」の「たう」 小末 記 203P

紀年きねんについて
この物語では

崇神天皇すじん（ハツクニ

シラス天皇すめらみこと）の渡来とくらいの頃からあつて神

功皇右の崩御ほうぎよおよび応神天皇おうじんの即位きせきに至るま

での「紀年」を大略たいりゃく日本書紀に

の記述きじつ通りに解釈かいしやくしてきた。

しかし、応神天皇崩御おうじん以後、欽明天皇きんめいの頃ころ

までの年代ねんだいについては、第1表だいいちへうに示すとおり

主として古事記こふしきの記述きじつを採用さいようしたい。

*

日本書紀にの「神代紀」を見みると、数

多くの「一書」が書き連つらぬられていいる。

これらの「一書」のうちうちのどこかに「密ひそか

に、本来ほんらいの歴史れきしをしのばせたのだらうと思おもわれる。

しかし、どれが事実じじつなのか判別はんべつするのは容易よういでない。

また、日本書紀にの「人皇の御世」の記述きじつに

おいでもよくいわれるとおおり、

これまで真実しんじつなのか分わからない。ようなら曖昧あいまい

模糊ぼことした表現ひょうげん方法はうほうが採とれたのだった。
往古おうこの本ほん当とうの歴史れきしを、そんな

「我が国の歴史」

天つき
改行

改行

高皇產靈たかみかほ 2518^{0-1/3} 2,505^P

天つき
改行

トコま 394 270 124
20頁79
期向は124年
足かけ125年

2,506 P

いったん 133
一端 部令

250411
250411

くったのだろう
までも隠してしまつてよいものであろうか。
心情として、どうしても述べておきたいの
に、日本書紀に記し難いことが多々あつ
たに相違ない。
そこで、編集事業に携わつた人々は、日本
書紀の一書の一つとして、古事記を
ようするに、日本書紀の記述に漏れた、
日本書紀の記述に漏れた、
端を、古事記の記述のうちに盛り込んで
いつたのであろう、と想察される。
その一たわけで、日本書紀と古事記
の内容に、
かなりの相異
ここに、第一表を見ると、
は二七〇年（紀）であり、
（記）である。
つまり、
四年に及ぶこととなり、
とうてい信じ難い。
しかし、幾代もの
代々襲名し

国力 口家の勢力

はぎょうと
朝業と盛ける
元1772

松尾天皇以前小治の命

2,507-1/2

宋書後口伝64 三国志(四)-302

百済内に50国「倭の五王」藤原生大川

2505~6 394
270
124

名と年と地位とを受け継いでゆかれたとすれば、必然的に長大な在位期間となる。

■それでは、一二年四年間(二七〇三九四)もの長い長い応神天皇の御世は、どんな時代だったのだろうか。

■次の重要な出来事を考えてみたい。

□狗邪韓(朝鮮半島南端部)を足掛りとして、海北九十五国を平げたこと。(宋書倭

国伝参照)

□長年にわたる宿敵であった東の国、狗奴国

(中国地方)を、ついに平定したこと、

□次いで、母国(旧出雲国)近畿地方

に国譲りをさせたこと。

□そして定かでないが、南の国、狗奴国

をも服属させ得たこと。

□このような倭国にとつての重大事が、次々

ら次々続いたとであらうと思われる。

■すなわち、

■応神天皇の時代に倭国は、国力が充実し

■海北の朝鮮半島に大きな勢力を及ぼすこ

H30(2018)6,21(木)~6,22(4回)
令和2(2020)2,17(月)~2,18(4回)

2,507^P-7/2

561.4.18(金)
→ H10.11.29(日)

52. 前頁 16行

2/18 F 2/18
2/17

となり、さらにまたその勢いに乗って
列島の統一の覇業をなし遂げたのであろう
と推察される。
以下、この線に沿って述べてゆきたいで

*

中国地方、近畿地方

大正29年306号
 ⑤ 2521^D - 2/2 八王の乱 東洋史評 357, 250³ はて
 同文 五胡の乱 元評 (16) 1140³ 果 (な) 4 1803³
 翌年 " "

海北の国々の目まぐるしい動向

西北方から中国本土へ移住した五種の異民族匈奴羯鮮卑
 倭国と拘奴国との鈐迫合が、果しくなくえん

えんと続いてゐるうちに、大陸の情勢が

八王の乱(二九一〜三〇六)に続く五胡の

五年（三一七）江南に東晋が起り、一方華北

注(

また、朝鮮半島の方の状況も、変転々々

ハ王の乱に引^ひきつ^ついて永嘉の乱^{えいかのらん}三〇七^{さんじゅうなな}し
 三^{さん}一^{いち}二^に加^か起^{おこ}る^ると、鮮卑族^{せんひぞく}の慕容^{ぼくよう}皝^{かう}が遼東^{りょうとう}郡^{ぐん}

↑↑↑↑↑ 高句麗の美川王は、三一年、鳥緑江
勢力を伸ばした。
びせん
おうりまう

河口の西安平県をおとし、遼東郡と樂浪

三
一
三
年
に
楽
浪
郡
を
亡
ぼ
し
、
三
一
四
年
に
帶

三国史記(2) 333P
藤内生大 114P 東洋史 836P
藤内生大 114P 三〇七-304P 辰韓 2510
2509P - 1/2
この頃には、まだ、倭のりかおさんでいない。
331P 391P 次頁 25P
333P 333P 333P

方郡を亡ぼした。(第1表参照)

つまり、西晋滅亡(三一六)直前の三一四年に、

西晋は朝鮮半島の支配権は高句麗へ移

ってしまっていた。

高句麗は、樂浪郡および帶方郡の地を領有

して、朝鮮半島に絶大な力を誇るようになった。

■ところで、時(三四)

「帶方郡討滅のとき」には、馬韓・辰韓など

も、高句麗軍にも参加していたと考えてもよ

かろう。(「古代朝鮮」井上秀雄、日本放送

出版協会、六八頁参照)

■あるいは、三一四年の帶方郡滅亡時(三四)

句麗と同じ扶余の出である馬韓や、馬韓

に従属する辰韓などは、高句麗の属

民とされてたのではなかろうか。(「倭の五

王」藤内生大、岩波新書、一一四頁八四七二

年に北魏に出した百濟王慶の上表文。三

国志「弁辰条」「公開土王陵碑」等参照)

因みに、百濟国王の慶司(蓋鹵王、四五五〜四七四)は、四七二年に北魏へ出した上表文においての

と
考
え
て
み
た
い
ぞ

つて
て
いた

すでに馬韓および辰韓は、高句麗の属民にな

三
一
四
年
に
帯
方
郡
を
討
滅
し
た
時
々
あ
る
時

すなわち

と記述している。

第二章へ箕子の南下^{きしなんか}において既述

部の土地を割いて与えてくれたのだ、
とい

て 軀 の 臣 ハ ヲ 下 主 だ と き
 其 軀 カ 其 の 東

か
人
く
に
い
わ
つ
た
ま
ふ
は
な
る
と
う

たち
は
古
の
逃
亡
者
の
子
孫
で、
秦
の
労
役
を
の
か

古老たぢが代々いゝ伝えとゝろは、自分

ころろ
居
は
だ
い
だ
い
の
東
方
に
位
置
し
上
の
地

「
長
年
は、
切
害
の
更
に
立
置
、
多
く
の
間
に
の

三國志、魏書、辰韓、辰辰、

波新書、一一四頁参照

休の王王に康鹿生方

と 求 の
7
1
3
0
7
委
の
五
王
一
求
と
習
ま
せ
り
た
、
、
う

あつたし
三国史記(2) 金富軾、東孝文庫 平社 三四頁

自分たちは、震と后に扶余の出で

[illegible]

古代朝鮮 73'
後西王和歌林 151'

大分 2044' 大分 1629'
計 吳漢 科 吳漢 科 吳漢 科 吳漢 科

魏文侯 96~97'
史料に 3 日本 歩み 21' 下
2521 - 1/2 弁辰 とも 同 2532' 6~29

次頁
から

2,510' - 1/2

前頁 4
時期的に いえは 未だ 少々 早い が
ま け て い る 。
王陵碑 (好太王碑ともいう) に
高句麗の 広開土
辛卯年来渡海、破百残、由來朝貢。而後以
以六年丙申、王躬率水軍、討科残国軍、首
攻取壺八城。(以下 城名等略)
あらまし
五十四ヶ所の
百済
新羅舊是属民、
百残、
羅、
羅、
以為臣民。

碑の 5 是 2552' 3/5
辛卯年 2558' 9/10

前頁

百残(百濟)・新羅は、もと是水属民、由

来朝貢す。しかるに倭辛卯年をもて、来り

て海を渡り、百残□□新羅を破り、もって

臣民と為す。云々

と記されてゐる。辛卯年を三九一年とする説

※この物語では、従来の解釈より六〇年早く

倭が辛卯年三三一年に海を渡り、

三三四年以前から高句麗の属民になつてゐた

百濟(百残)・馬韓(馬韓)や新羅(辰韓)などを破

り、もつて臣民と為した

と解した。追つて詳述した

さて、樂浪・帶方二郡の滅亡に引き続

さらに三三六年に晋(西晋)が元寇したことは

朝鮮半島の政治形態や社会構造に大きな影

響を及ぼした。特筆すべきことがある

この混乱の頃、韓の地の国々の国号が変わつた。

馬韓諸国から百濟国へ、辰韓諸国から新

羅国へと国名が改められたのだ。古代朝鮮

それでは、弁韓はどうかという国名ではな

たろうか。定かでないが、弁韓は日加羅

と記されてゐる。

井上秀雄、日本放送出版協会、六八〜九頁参照

天つき
改行

2,511^P - 1/3

2509^P - 1/2 884

あえて言えば

トル

うう、と想察される。

*

百濟へ、辰韓から新羅へ、と国号が改められ
たのだろうか。

確証はないもののであるいは

① 三十四年の帯方郡滅亡以前に「馬韓や、辰
韓などは、——高句麗の属民」とされた

② そいてこの当時

高句麗の強い意向により、馬韓は百濟へ
辰韓は新羅へ、国号を強制的に変更させられた
という経緯があったのではなからうか。

馬韓、辰韓などの国々のうちの一個国だけ
が国号を変えたというのならまだしも、複数の国

がほぼ同時期に国名を改めたという結果の背景
には、——それなりの大きな理由があった

と思われる。

朝鮮半島南域の

2.511^P 2/3

政治的介入 次頁 19頁

■なお「三国史記」新羅本紀「三〇七年条

に「
「国号を新羅にもどした」

とある「

・も「か」たら早くも三〇七年に「高句麗」

が「

「辰韓から新羅へ」
と「国号を変更させたのかも知れない」(第

一表参照)

・も「とも」三〇七年以前に「新羅」とい

う国号を採用していた時期があったのかどう
かについては「よく分からない」

(X)

■それでは「弁韓はどういう国名で呼ばれた

のだろうか」

・定かでないが「弁韓あたりは「加羅」

と称され、たのだらう。たのかわりない。

・東洋史辞典に創元新社へ加羅の項には

こう記されている。

「加羅（伽耶・韓）の呼称は、古くは南朝

鮮全般の諸部落国家をさしていたが、四世紀

に百濟・新羅が建国したのちは、この両国の

統一圏内にはいらない残りの諸国に限定して

用いられるようになった。この地方は早くか

ら日本の政治的進出をうけ、最後まで統一国

家を形成せず、部落国家連合の段階でとま

った。弱少な加羅諸国のうちで比較的強力で

あったのは大伽耶（高霊）・金官伽耶（金海）

であったが、それでも六世紀のなかごろまで

に新羅によって滅ぼされた。

という。

・三国志に魏書・弁辰条に示されているよ

うに、弁韓は鉄の産出地であった。

・そこで、他国（倭国・高句麗・新羅など）

からの介入があいつぎ、ついにこの地域では最後まで統

一国家の形成がとができなかつたためであ

ううと考察される。

辛卯年 (331) 赤 2510^P
 2579^P 2596^P 2653^P - 1/2

あまのほひのみこと
天穗日命

それは、このことであつたらうか。定かでないが、あるいは、辛卯年（三三一）の三年程前（まえ）あつたかも知れない。

倭国の意気は、
弥々高揚してゐた。

「高句麗の属国となつてしまつた新羅に」

かつ
て
の
力
は
な
さ
そ
う
だ
そ

新羅の後楯加無に等し今拘奴国など何程

の
こ
と
が
あ
ろ
う
か
し

7
1
ま
こ
そ
、
拍
奴
国
を
徹
底
的
に
討
ち
平
ら
げ

3 好機といふものだ
ろろ

倭国中に、掴みからんばかりのキウキウした熱。

気があふれており、
 中はや誰もそれを押
 ーとどめ

られそうになかった。

天照大神 (市杵島姫) と高

皇產靈尊とは、天の安の河の河原に八百萬の神

と神集へに集へてこよう仰せられた。

神代記、神代紀参照
たかみむすひのササ

第一表 其筋 第一編 『出雲国の国造り』の末尾 高皇產靈尊は
 天孫の象徴化された神

2516 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100
 2516 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100
 2516 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

2516 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

2516 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

2516 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

7 あ、の、葦原中国の邪、き鬼、共を平らげさせようと思ふのだ、か、誰を派遣したらよいだろうか。おまえたち諸神よ。その知るところを隠さず申せし。

すると神達は、皆で相談し、こう申し上げた。

7 天穗日命は、倭物ですから、この神をたぬに派遣して、ごらんになるのか、よろしゅうございまいよう。

7 そ、こ、で、神々の言葉に従つて、天穗日命を中国平定のために派遣することになった。

(神代紀下第九段本文、神代記参照)

天穗日命は、勇ましく、大勢の兵共を引きつれて中国(今の中国地方)へと下つてい、つた。国境を越え、勇ましく踏み入、

な、お、

7 天穗日命(天菩比神)は、天照大御神の第二子である。

という、

(「古事記」新潮社、七八頁、注四参照)

ともあれ、天穗日命は、何代目かの天照大

2516 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

2516 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

紀上 131
131
131
131

2,514 - 2/3

我 記 74 注 2
ひむ 1888
せんちゅう 船中
船の内
2759 3/4
記 73 ~ 4
2546
146
2546
2759 3/4
記 74 19

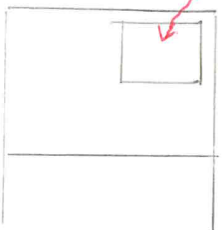
つたものの先のことを伝えて、こちらへと
やって来るのが見えた。
次第に近づいてくるその舟は、まるで
摩訶（これを割ると小舟に似るといふ）を割つ
たようであつた。（写真図版 410 参照）
小舟に乗っている数人の男達は皆、我鳥（蛾）の皮を丸剥
きに剥いで衣服に似たような口服と身を
貴公子とおぼしき小男（童男）を頭とする者
達は戦い敗れ、かうういて逃げのび、潮
水のまにまにこの浜へ浮き至つたのだつた。
大己貴は、そんな男達の物色（かたち）を怪み、心の
内に、
この者達は、毛人（毛人）ではない、
拘奴国（中国地方）の者でもない。きっと、
天の国から下つてきたのであろう
と思つた。
そこで大己貴は、へと降り立つた男達を温
かく迎え、臣下の者たちに、

昔羅摩の古名

カラー

左頭。左上 $\frac{1}{4}$ に
掲載下さい。

(西から見て左)



2,514^P-3/3



この写真は、
「出雲校」に
行こう」の
コヒーレント
に見る17
の
562^P
カラー大図
147^P
「出雲校」
「出雲校」

2517^P
「出雲校」
「出雲校」

「出雲校」
「出雲校」

「出雲校」
「出雲校」

「出雲校」
「出雲校」

1309.

1409

写真図版 410

羅摩 (羅摩の古名)

『朝日新聞』平成16年10月21日付「花おりり」＜ガガイモ＞参照

12. 9. ガガイモ科の蔓性多年草。果実は長さ10cm、中には長い綿毛をもつ種子が
びり。この果を割ると、小舟の形になっている。(「広葉花」＜ガガイモ＞参照)

小男 諸神 記23/ 唇 633
紀上130末 記24

2,515P-1/2
630
くちい くちなる

「粗相のないうよう
お連れするかい
と命じた。
無残な大敗を喫し、
雲国へたどり着いた惨めな達、
もよたよたと歩いていった。
大己貴の都には、
八重垣がめぐらされてい
た。
そんな都城の内奥の宮中に招かれて、
腹のくちくなくなつた小男達の頬や唇に、
うやく赤い血の気が戻ってきた。
母の根国の王大己貴は、小男に尋ねた。
「あなたは、どんな様でしうか
だが、小男は自ら答えようとなかつた。
また、小男に従う諸神たちも皆、
「全く存じ上げません
と言うばかりだった。
見ず知らずの者に名を明かすわけにはゆか

落武者

みや
見達

こ

五世
2484 1/2

高名 759

2,515 - 3/2

記(四) 74

ない、と思うたのであろう。

ばり畏

その時、多^た邇^に具^く久^く（墓^{ひきかえ}）のように這^はいつく
また一人の従^{しやう}者の一人^{ひと}か、こう言^いった。

「^{たす}田圃^{とんぼ}の中^{なか}の久延毗古^{くえんひこ}（栗山子^{かきやまこ}）にでもお

尋ね^{たず}になるのがよろしゅうございますで、久^く

延毗古^{えんひこ}ならば、必^{かなら}ずや、知^しつてゐる^まで、

よう^し

数日後^{すういつつ}

たとき

大己貴^{おほあなむち}は再^{また}び尋^{たず}

ねた。

「^い実は何^{なに}を隠^{かく}しまし

よう、私^{わたし}は素^す多^た鳴^{なり}命^{めい}

の五世^{ごせい}の孫^{まご}で、日^ひ葺^ふ根^ねと申^{もう}す者^{もの}です。貴^{あなた}方^{なた}

様^{さま}は、きつと倭^わ国^{くに}でも高^{こう}名^{めい}な御^お方^{なた}と拝^{はい}されま

す。ど^おうぞ、御^お名^なをお明^あかし下^{くだ}さいませ

驚^{おどろ}いた小男^{こなん}は、大^{おお}きく領^{りやう}き

を負^おつて歩^{ある}くことはかな^かなぬな^なが^からも傍^{そば}に侍^{せい}

す。崩^{くずれ}え^{ひこ}（久延毗古^{くえんひこ}・栗山子^{かきやまこ}）の方^{ほう}を見^み

やつた。

野見宿禰 紀上266 紀上590 紀上6
天つき
改行

紀上150⁹ ⑥2525-7/2 2.517^P-1/5
宇像の神官

「出雲大社」学生
180⁹

紀上150⁹ ⑥2537-1/2
KST

口造り凡上525⁹
紀上134⁹

穂日命は、はからぬも根国へ漂い着き、
まるで大己貴に倣り媚び付いたかのようにな、
居着いてしまった。
尚、後年のことながら、出雲国の国譲り条
（神代紀下第九段一書第二）に、こう記され
てゐる。
「汝（大己貴）が祭祀を主らむは、天穂日
命、是なり」
●そして何と、現在に至るまで出雲大社の神
主として代々出雲国造を継いでいる日千家
の家は、この天穂日命を始祖と仰いでいると
いう。（「出雲大社」千家尊統、学生社、四
頁、一ハ〇頁参照）
ようするに、
↑↑↑↑↑ 大国主の子孫がどうなったのか
はさておくとして、———とあれ、出雲大社
の神主として、大己貴、大国主の霊の祭祀
を主っているのは、天穂日命の子孫である
というのである。
（左）「大国主の子孫についでては、追つて

2878245 2535R 1/2 497

「荒筋」第一編「出雲国の国造り」末尾において既述

神代卷 11-123

たかみむすひのみこと
高皇產靈尊は男性であつたろう
かゝとも思われる。

あるいは、
高皇產靈尊（何代目かの天照大神）と、
何代目かの天照大神との間の子として、天穗
日命が生まれた。少彦名命
と考へてみる必要があるのかも知れない。

（1）因みに述べると、日本書紀において、
「葦原中国へ將軍や皇孫を降す人は常に高
皇產靈尊であつて、天照大神ではない。しか
し、皇孫に三空を伝えるのは天照大神である。
云々」
（三種神器）
という。（「日本書紀」上）日本古典文学大系
岩波書店、一三四頁、注一二参照。

（2）また、
高御產巢日神（別名、高木神）は、至上
神、天照大神と形影相伴うごとく登場し、皇
祖神として重要なはたらきをする。云々

せんりつ
旋律

くろく 130(2018)6,22(金)~6,25(4回)
奏楽 1282, 下
音楽 音楽を奏すおと

生むの主
神(聖)33P

2720°-2/3
2,517°-5/5

27592 1/3 月
月読尊 紀上87°
うけひ 紀上104°

天照大神 紀上106°
2778°

と想察される。



録の又参照
なるほど定かなく
水なければならぬ問題点が多々あるとはい
え、とりあえずこの物語においては、
①中御中主尊は、天照大神を投影した神であ
り、――さらに、人皇の御世の神功皇后に
も相当する。
②高皇産靈尊は、二代目の天照大神の男弟で
ある月読尊、及び天照大神が素戔嗚尊と
誓約された時にお生みになったという天忍
穗耳尊を投影した神であり、――さらに、
人皇の御世の応神天皇にも相当する。
③神皇産靈尊は、素戔嗚尊を投影した神である
と考えてみたい
すなわち、
「奏楽において、同様の旋律が繰返し繰返
しかなでられるように、――記・紀において
同一あるいは類似の事柄が、幾度となく
繰返し記述されていくのであらう」
と想察される。